昭和51年12月22日 第3種郵便物認可
KSK増刊通巻766号（毎月4回5・15・20・25日発行）

KSK まちの仲間

創刊号
発行日　1992年8月10日
発行人　神奈川県身体障害者団体定期刊行物協会
横浜市中区桜本町1－1
横浜市健康福祉センター内
編集人　横浜市グループホーム連絡会
横浜市中区本牧満坂10本牧生活の家内
TEL 045(623)5318 FAX 045(623)5319
編集責任者　室津　滋樹
定　　価　100円

創刊にあたって

横浜市グループホーム連絡会
会長　室津　滋樹

グループホーム連絡会がいよいよ機関紙を発行することになりました。今まで連絡会では連絡会ニュースという入居している人たち向けの新聞は発行してきたのですが、このたび、もっと多くの方々にグループホームのことや、グループホームの必要性を知っていただきたいというきもちから、機関紙「まちの中で」を発行することとなったのです。

さて、グループホームという名を耳にしたことがある方も多いとおもいますが、いざ、グループホームとは何かと問われるとむずかしいものです。

グループホームとは、地域にあるふつうのすまいで、だいたい4～5名の障害者が、専任の職員による援助（内容は障害によってまちまちですが）を受けながら共同で暮らす生活のかたちをいいます。もちろん家賃をはらい、生活費などは自分で負担するのが原則です。

横浜市では一九四年からグループホーム試行事業がスタート（残念ながらいまだに試行のままですが）しました。ほかの多くの自治体でも生活寮、生活ホーム、自立ホーム、ケアつき住宅など呼び方はいろいろですが、グループホームの制度があります。国も平成元年からグループホームの制度をスタートさせました。同じものが自治体により呼び方がちがったり、制度の中身が多少異なることなどがグループホームというものをわかりにくくしているのかもしれません。

しかし、各地のさまざまな状況から多くの生活の場が生れてきたわけですが、どれも同じようなかたちのものができてきたということ自体、グループホームの必要性を雄弁に語っているように思えるのです。

つまり、まちの中でふつうに暮らしたいという障害者のきもちを実現したのがグループホームなのです。

グループホームで生活している人たちは、地いきの中で一人で生活するのはむずかしい人たちです。一人で生活することがむずかしい人たちにも、親や兄弟の世話になるか、入所施設に入るかの二者択一ではなく、まちの中で自立した生活ができるようになったのです。

グループホームでは、手助けが必要なことは職員が手をかします。入居者によって苦手なこと、できないことはいろいろですから、職員が手をかすのは、お金のことや生活上のアドバイス、食事づくりやそうじ・洗濯などの家事援助、食事、入浴、トイレ、着替えなどの介助などさまざまです。

グループホームで生活している人たちは、できないことや苦手なことをてつだってもらいながら、自分の部屋をもち自分のお金で必要なものを買い、地域の一住民として精一杯生きています。

おおいに期待され、必要性の高いグループホームなのですが、補助の制度ということになると、非常に貧しい内容です。現在のグループホームは職員たちの献身的な犠牲の上に成り立っているといっても過言ではありません。

まだまだグループホームは芽がでたばかりです。この芽を大切に立派に育てるためには、多くの方のご支援と御協力（それというまでもなくこやし）が必要です。そのために力のない連絡会ですが機関紙を発行しようなどと大それたことをはじめてしまいました。どうかこれからも暖かい目でご支援ください。

＝お母さんとの会話＝

おれのうち

グループホームダンボ　玉井　洋

＜お母さん＞近ごろうちのごみ置場にカラスがきて、ごみをちらかしたり、カァカァうるさいのよね。

＜ひろし＞フーン、おれんちの方もそうだよ。朝早くからカァカァないてサ。それからまだいるよ。牛もにわとりも犬も、ぜーんぶなくとうるさいよ。

＜お母さん＞そうだね。あんたのうちの前、はたけで、お百姓さんがあるからね。

＜ひろし＞ウン。だけどそうじゃない時はしずかだよ。

グループホームは、泊りに行くところと思っていた洋でしたが、いつのまにか、グループホームをおれのうちと思うようになりました。

グループホームやまゆり

池田 勇美子

私たちの、グループホームやまゆりは、きょ年の九月にできました。男一人と女四人で生活しています。

はじめはさびしかったけれど、もうすっかりなれました。そうじやせんたくも自分でやります。

おふろの　おゆのおんどが、むずかしくてこまりました。

あさ、おべんとうをつくるのはとてもたのしいです。

私は　しんぶんがかりなので　しんぶんを　ポストからとってくると　すぐテレビばんぐみを　みます。

しょくいんの　西山さんと安どうさんは　いつも　やさしくしてくれます。おいしいしょくじをつくってくれます。私たちも　てつだいます。

ときどき　けんかをするときもありますが、たのしく　くらしています。

わたしたちのいえ

グループホームのくらし

二人三脚の家に来たわけ

柴田　博

お父さんが死んだら、帰るところがないからここにくることをえらびました。それと同時に、ここにきて自由に生活したかった。自由とは、自分であそび、自分で考えて生活すること。たとえば、自分でカセットテープを買ったり、きいたりすることができるのです。自分のいえではやらなかった、くつ下をえらぶことや服をえらぶこと、食事の準備もしています。

1年間　新井　慶郎

グループホームができたときいた時僕はびっくりしました。まさかこんなところにはいれるとわおもわなかった。でもぼくはカメがルーの家にはいれてよかったなとおもいました。

おわり

昭和51年12月22日 第3種郵便物認可
KSK増刊通巻766号（毎月4回5・15・20・25日発行）　まちの中で　1992.8.10 発行

本牧生活の家

「生活の家」では、毎日夕食後に、入居者同士のミーティングをしています。これよりある日のミーティングの風景を紹介しましょう。

三浦（司会）ミーティングはじめます。おふろ、入る人！どっちが先！　板垣…ハーイ。
三浦…ぶ、ぶ、物品費は！　（生活の中で使う、ティッシュやトイレットペーパーのお金のこと）
西岡…ハ～イ。ごはんがすんだらお金集めま～す。　三浦…ネ～、ホントに出すの～！
西岡…だすの？って、トイレで紙がなかったら、きたないでしょう？
三浦…あ～そうか、やちよ　だすよ～。　西岡…ちょうだいね。
桑原…エッ～！きょうだっけ？（と、とぼけ顔…）
今井…ハッ、きょうだっけ！（ア～ア、桑原さんに続いて今井さんまで）
桑原…オレ、きょう金ないよ～！　板垣…いくらだっけ？待って…
西岡…一週間前にいったでしょう！　桑原…だって、聞いてないモン！
西岡…もう～！お金ないんだから～！とにかく、きょうくださいね！

（集金のときはいつもこのさわぎ！なんとかして～！）

以上、ミーティング終了。ひとそうどうの結果、無事集金もおわり。
一人一人がどくとくの個性をだしあいながらの生活。まとまりはないけれど、にぎやかな家ですヨ。（西岡）

創刊によせて

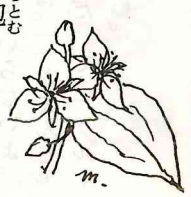
創刊によせて

横浜市民生局長　河野　勉

機関紙の創刊、まことにおめでとうございます。

グループホームA型は、障害をもった方々が地域で普通に生活することを目指して始められた事業です。その数も今では八か所となり、地域の中で着実に根づいているものと考えています。また、日々の運営を通して、障害を持った方々が地域の住民と交流し、障害をもった方々に対する理解がさらに深まりつつあることは、グループホームがノーマライゼーション実現のために大きな役割を果しているものと言えましょう。

機関紙の創刊が、さらに多くの人々にこの制度を理解して頂く機会となり、グループホームの一層の発展に寄与するものと期待しております。



共生の社会を求めて

(財)横浜市在宅障害者援護協会
理事長　酒井　喜和

「まちのなかであたり前の生活をしよう」まさにそのことが私たちの求めるノーマライゼーションであり共生の社会である。

いま、グループホームA型は、横浜の地で全国に先駆けて拡がり、根を張ろうとしている。

しかし、残念ながらまだ、行政的な支援体制は決して強くはない。

私はグループホームこそ、これからの地域で生きる障害者にとって最大の拠りどころになるだろうと思っている。

幾多の難関が予想されるが一緒に手を取り合って頑張ろう。

創刊によせて

カンガルーの家

西　道生

去年の一月七日からはじまった。おれは、カンガルーの家で、ちゃわんをあらったりせんたっきで自分の下ぎをあらいました。会社が土曜日にお休みのときみんなのへやのそうじをしました。夏には、おまつりに行きました。

わたしの夢

山根　治子

私は、ダンボ作業所とホームを早く卒業し、完全に一人立ちをして、アパートを借り、生活をしながら…休みのときには一人で出かけたり、友達に遊びに来てもらったりして…自由に生きて行きたい…と思っています。そして、好きな人ができて、結婚したいです。

ふれあい生活の家

創刊によせて

「まちの中で」に乾杯！

元厚生省 専門官
日本社会事業大学
社会事業 研究所
中沢　健

街の中の暮らしそのものがこれからの福祉サービスの主役です。だから、街の中での暮らしを街の中から、街の人たちの中へ発信することが求められています。

〝施設の窓を少し開けて街の暮らしを〟や、〝本人抜きに本人の暮らしを〟語る過ちを、もう犯してはならないのです。

共に生きる住民として、語りあう場が、大切なのだと思います。『まちの中で』……深い意味、そして明日を感じる題です。乾杯！

いい生活を

県愛護協会会長
素心学院施設長
田代　哲郎

「行って来ま～す。」「行ってらっしゃい。傘持った？雨降りそうだよ。」「ウン、持ってる。カバンの中だよ。」「じゃ気を付けて」……

グループホームの朝の風景。

人は誰しも仕事を持っている。この世の中に生まれ、勉強や訓練を終え大人になったらどんな形でも仕事を持つ。そして自分の生活の形をつくる。

グループホームは働く仲間たちの家である。何人かの仲間たちで助け合い、又寮母さんや近所の人たちの力も借りながら、立派に自分たちの生活を作ろう。

朝早くから夕方遅くまで会社でがんばる人、パートタイマーの人、作業所で働く人もいる。昼間は洗濯物だけがお留守番だ。

夕方、「ただいまぁ～」「おかえりなさい。」「あした会社の創立記念日だから弁当いらないよ。」「そうよかったね。」「おまんじゅうと弁当でるんだって。」グループホームは楽しい。

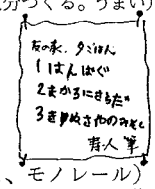
創刊によせて

昭和51年12月22日 第3種郵便物認可
KSK 増刊通巻766号（毎月4回5・15・20・25日発行）　まちの中で　1992.8.10 発行

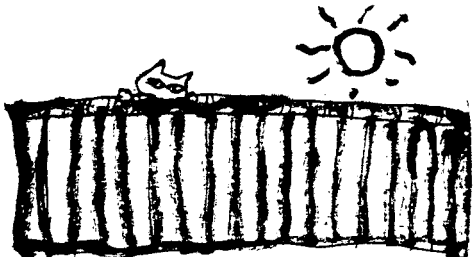
"友の家"の朝（くろは）

朝ごはん

Aタイプ　おかず＋白ごはん＋お茶づけのり
Bタイプ　おかず＋炒飯（藤尾さんが4人分つくる。うまい）
Cタイプ　おかず＋パン＋コーヒー
Dタイプ　パン＋コーヒーだけ
Eタイプ　日替わりであれこれしてみる
Fタイプ　パンもごはんもたべていく



7:00ごろ第1陣4人でかける（歩き、バス、モノレール）
8:00ごろ第2陣3人でかける（自転車、バス、バイク…大学生同居）



ホームでのくらし

米田まり子

私が二人三脚のいえでいつもみんなとたのしく、男の人はおふろ介助、ハミガキ、ごはん介助をたのみます。私は、ごはんをつくります。朝おふろをあらいます。それからそうじをします。いつもボランティアさんにくすりの確認をしてもらいます。私は、親からはなれていい体験をしています。ボランティアさんの電話かけすると、いつも「たのみます」とあたまをさげます。親から自立できてよかったです。

グループホーム「くじら」のくらし

加藤　正

グループホーム「くじら」の入居者は五人。その構成は男性四人、女性一人です。ひかく的年れいが高めなこと、グループホーム入居以前より個々の生活のパターンがある程度あるため、どちらかというと行事などは少なめですが、みんな自分なりにマイペースで日々をすごしています。あまり、気ばらず、淡々と地域の中でくらしていきたいとねがっています。

創刊によせて

行政が大胆な一歩を

日本女子大学教授　谷口　政隆

十年ほど前になるのだろうか、在宅障害者援護協会でグループホームの性格論議を始めたのは。そして、一九八四年に草の根型のグループホームが誕生。一九八〇年代は、横浜市の福祉に大きな変化が生じた時代だと記憶されてよい。

だれもが「住まい」を持って自律的に暮らすことのすばらしさ。この実証にもとづいて、九〇年代はグループホームの全面的な、そして本格的な展開の時期だということが、誰の目にも明確になった。みんなが、自分の心の拠り所と地元のネットワークを持って「まちの中で」暮らせるように、行政が大胆な一歩を踏み出してほしいと思う。

創刊に寄せて

横浜市地域作業所連絡会会長　新井　喜之

機関紙「まちの中で」創刊おめでとうございます。この機関紙はグループホームに入居されている方々の実際の生活や、生の声を多くの人々にお伝えする部分で大変重要な事の一つだと思います。

いまさら言うまでもなく、「地域作業所」が障害者にとって働く場であり、デイケアの場ならば、「グループホーム」がナイトケアを含んだ「生活の場」であると思います。そしてこの二つの連携がとれてはじめて、障害者が地域であたりまえに生きることの実現につながると信じております。

「地域作業所やグループホームが在ることが地域の自慢です。」と言われる地域社会と、誇りを持って従事する職員の身分保障が出来るような日が一日も早く訪れるよう共にがんばりましょう。

創刊によせて

シリーズ

みんなでかんがえよう

―グループホームの課題―

不安定な職員体制

グループホーム「やまゆり」
上野　敬子

グループホーム「やまゆり」は昨年九月に始まったばかりで、二十一歳から二十八歳の男女五人が職員、アルバイト、ボランティアの助けをかりて、近所の人達の暖かい応援の下、街の真中で生活しています。

初めて親元を離れた人達ばかりですが、私達の心配をよそに皆で協力し合って元気に暮らしています。そのいきいきした様子を見ると、準備や発足後の親達の様々な苦労も吹きとんでしまいます。

ただ職員体制に大きな問題があることがわかって来ました。職員の仕事は当初考えていたよりもずっと大変です。食事の用意、洗濯、掃除、入浴その他日常の細々とした援助だけではなく、五人の障害者の心と体の健康への配慮、各々が持ち込む問題への適切な対処、助言、精神的な支えなど高度で重要な仕事があります。夕方から夜、そして泊り、翌朝までという勤務が主であることを考えると、たっぷり二人分の仕事はあります。しかし今の補助金では人件費が全部で新入社員の給料一・五人分くらいしかありません。現在はやむを得ず浮世離れた労働条件で二人に変則勤務をお願いし、アルバイトで補っていますが、それでも赤字が出そうです。人件費の増額がどうしても必要です。もう一つは、職員が冠婚葬祭や病気などで休んだとき、代わりの人がいないことです。急に知らない人が来てもどうにもなりません。「やまゆり」では、今までに何回かありましたが、出来たばかりということもあって、親が交代で泊まらざるを得ませんでした。本来親から自立するためのグループホームなのですから、これでは具合がわるいのです。いつでも臨時に代われるように三人くらいの人に時々関ってもらわなければなりませんが、現実的には大変難しいことです。いくつかのグループホームで人員を安定的に確保する仕組ができないものかと思案しています。

一人体制の中で

グループホーム「くじら」職員
加藤　正

職員体制が一人のグループホームに勤務して、気になった点を書いてみました。

※入居者の立場から見て

(1)　職員が一人のグループホームでは、入居者と職員の間に何かの人間関係上のトラブルが起きたとき、それが、スムーズに解決されないとしこりとなり、介助などに影響が出るのではないでしょうか。

私の実践では、(1)に注意を払い、ものを言いやすい雰囲気を心がけています。

(2)　職員が病気などのときの入居者の不安感はつらいものがあるのではないでしょうか。代わりの職員が確保されていないということは、障害の程度によっては死活問題につながるのですから。私自身何度か病気などになりました。入居者は黙っていますが、不安な顔をしていました。

※職員の立場から見て

(1)　病気のとき、ゆっくり休める体制になっているかどうかは入居者はもちろん、職員のその後の回復にも影響するのではないでしょうか。一人で日常業務を支える精神的な負担感も含めて。

(2)　孤立感・孤独感におちいりやすい面があります。仕事というのはある意味で、切れめごとに検証が必要です。その検証が、注意していかないと、ひとりよがりになりがちです。一人体制で危険なの

昭和51年12月22日 第3種郵便物認可
KSK増刊通巻766号（毎月4回5・15・20・25日発行）

1992.8.10 発行

は、長く続けていくと組織的な見方、複合的な見方ができにくくなる可能性があるということです。

今までの運営をふり返ると、すでに述べたこと以外では、グループホームのオープン後の数ヶ月は特に運営委員会のバックアップが弱く、それが後の運営に悪影響を及ぼしました。また、気になった点について私なりに防止に努めましたが、一人ではやはり限界があるのも事実です。こうしたことをふまえて、今後よりよいグループホームへとつながり、制度の創造へと広がればと思います。（オープン時より、ちょっと違う顔つき入居者達を見ながら。）

Oさんの死を通して考える

―小規模福祉ホーム補助制度の問題点―

精神障害者小規模福祉ホーム
すずらん荘運営委員長
大友 勝

小規模福祉ホームすずらん荘を九十年に開設してから、この七月で二年目を迎える。

作る側からの思いは別として、入居している人にとって、すずらん荘の住み心地は、本当のところどうだったんだろう。職員にとってこの二年間は何が問題だったのだろうか。援助の中身は、どうなのか。

こんな事をじっくり考える間もなく、Oさんが肝臓ガンでこの五月、なくなった。享年五十六歳。若すぎる死。

Oさんは、愛知県で生まれ、施設で育ち、両親にも早い時期に死別し、中学卒業後間もなく、故郷を飛び出し、長く日雇い仕事をしてきた。そして、ある時期から「寿町」のドヤ「簡易宿泊所」に住み、生活保護を受け「はだしの邑」に通所する様になっていた。はだしの邑は「寿町」から通所する人が比較的多く、単身で合併症を持つ人を「作業所」だけでは支え切る事の難しさを感じさせる人の一人であった。この様な状況を何とか改善したいとと考え、「生活の場」として「すずらん荘」がはじまりOさんも入居する事になる。そして、この五月、帰らぬ人となった。

職員から、病状を聞いたり、病院にお見舞に行ったりする中で「運営委員長」という立場上、次の入居者の事を考えた。

「今、そんなことを考えるのは、不謹慎だ！」と言われもしたが、補助要綱には、たとえ病死や突然の事故であろうと、翌月の一日には、入居者が確定していないと年度途中であっても、定員五人が四人になったと言うことで、一度補助金を戻入れし、再申請することになっている。それが、職員の給与にも撥ね返ってくる今の制度は是非改善してもらいたいと思う。職員雇用費を定員と切り離し「翌月一日」にある程度幅をもって対応するよう是非改善してもらいたい。

病人の顔を見ながら、次の入居者を考える辛さは、あってはならない事だ。もう少しスキ間が欲しい。

《まとめ》

地域の中で、ふつうに暮らしたいという障害者の気持ちからスタートしたグループホーム。運営する人も職員も、整っていない今の制度の下で入居者の生活を支えることは、とても大変だと思っています。でも、「じゃ、やめてしまおう」という人はいません。皆、口をそろえて「何とかいつまでも続けたい。制度を良くしたい。」と言うでしょう。

そう思うのは、グループホームで生活している人々が、今までになく生き生きと、のびのびと暮らしているからです。大人としての自信と希望を持ちはじめるからです。特別な悩みではなく、だれもが抱く悩みを持つ姿に接するからです。

朝起きて、朝食を食べ、昼間の活動の場に出かけて行く。夕方帰って来て、夕食を食べ、おふろに入ってくつろぐ。このふつうの暮らしの中で、はばかることなく自分を表現しながら生きている人たちの姿がグループホームにはあります。

障害の軽い人から重い人まで、今まで「ふつうの生活なんて、とてもとても……」とあきらめていた人たち、特にふつうの暮らしができるところのなかった障害の重い人たちにとって、グループホームはひとすじの光なのです。

多くの障害者の夢と希望をのせたグループホーム。困難はたくさんあれど、多くの人々の理解と支援につつまれて、その芽をはぐくみ、育てていきたいと思っています。

（グループホーム連絡会）

お・ね・が・い

基金づくりにご協力を！

グループホーム運営支援基金のためにみなさんのお手元でねむっている未使用のテレフォンカードをご寄付下さい。

送り先　横浜市グループホーム連絡会事務局
住　所　横浜市中区本牧満坂10
　　本牧生活の家
　　ＴＥＬ　045－623－5318
　　ＦＡＸ　045－623－5319

ぼ・し・ゅ・う

☆男子職員募集－グループホーム　ダンボ
勤務内容■障害者の生活指導
お問い合せ■045－333－5990（地域作業所ダンボ）

☆男子職員募集－本牧生活の家
お問い合せ■045－623－5318

☆ボランティア募集－生活の家
・入浴、食事などの生活の介助
・男女共（体力、熱意のある人求む）
お問い合せ■045－623－5318（本牧生活の家）

☆ボランティア募集－二人三脚の家
①入浴介助（男子）月1回でもかまいません。
②キャンプ同行ボランティア（男・女）8月中旬1泊
お問い合せ■ 045－362－5241

お・し・ら・せ

☆グループホームの紹介ビデオ

私たちもまちの中で生きたい
－グループホームのくらし－

を貸し出しますのでご利用下さい。
お問い合せ■045－471－0556
（在援協）

☆『くじらまつり』へどうぞ
と　き■10月25日（日）
ところ■空とぶくじら社
▲バザーその他いろいろあり
みなさん、遊びに来て下さい。
▲当日のボランティアさん募集！
お問い合せ■045－352－2202
（グループホームくじら）

編集後記

“どうぞよろしく”　－編集員紹介－

手話とエレクトーンに夢中の…山根治子（グループホームダンボ入居者）
恋人募集中の……西岡直子（本牧生活の家入居者）
入居者編集員に期待している…
- 新井舒子（カンガルーの家）
- 室津茂美（ふれあい生活の家）
- 岩崎賢江（グループホーム友の家）

あ～、ナントカできあがりました。入居者のみなさん、むずかしそうなところもみんなでよんでネ。感想や意見、次にのっけてもらいたいことなど、ドシドシ知らせてください。原稿をお寄せ下さった皆様、お忙しい中をありがとうございました。今後とも「まちの中で」をどうぞよろしくおねがいいたします。（い）